



西方 隆広

### スイスの老人ホームについて

我々の海外研修もいよいよ第5日目となり、2つ目の訪問国のスイスとなった。毎日ホテルを移動するため慌ただしい毎朝だったが、スイスには2泊するためホテル出発が10時で、久しぶりに朝ゆつくりすることができた。

サテ、スイスは人口は697万人・九州にほぼ等しい面積41,293㎡で、うち4分の3が山地である。公用語は、独・仏・伊及びラテン語の古語より派生したロマンシユ語。26の州からなる連邦共和国である。首都はベルンだが、我々には国際機関があることで有名なジュネーブの方が馴染みがある。ここジュネーブは、人口17万人。レマン湖の辺に位置し、三方をフ

ランスに囲まれているため、仏語圏である。もちろん、英語はどこに行っても通じる。と、ここまではガイド・ブックにかいてあります。フランスフルトのゴミ焼却場、ミュンヘンのイットリンガー通り小学校ときて、最後の視察となる老人ホームのバル・フロ

リー(VALLERUI)を訪問させていただいた。10時半も過ぎた頃、ジュネーブの旧市街を抜けて直ぐにホームに着いた。案内係のレイモンドさんの説明と手際よいよ進行の現地ガイドのマキタさんの通訳にもかかわらず、12時40分と予定を少々超過して、飲物まで載って案内していただいた。

#### 《施設の概要》

1933年にジュネーブ州の老人ホームとして設立。1943年に財団に買収され、女子寮に使用されていた時期がある。現在は、数次の増設を経て、270床の比較的大規模な老人ホームとして再び使用されている。目的は、入

所者に快適な環境と生活の場を提供することであり、財団経営であり非営利目的である。総職員250名のうち看護婦30名、ヘルパー130名であり、入所者は255名である。満床時で入所者と職員との比は、1:0.9である。敷地面積は、2ヘクタール。

#### 《所内での生活等》

34名を1ユニットにしている。まず、食事は自室やユニットごとの食堂でとれるが、自分で動ける人はカフェテリアを利用できる。訪問者がいると一緒にそこで食事をする。個人ごとの食事管理メモがあり、嗜好に合わせてメニューに若干手を入れる。アルコールは、グラスワイン1杯を飲む。カフェテリアでは自由にビールも飲める。

部屋は、1人部屋か2人部屋であるが費用は同額である。個人の家具を持ち込んでよい。全室テレビとトイレ付きである。シーツは毎日交換する。日本式の風呂は必要に応じて利用可。大抵の人はシヤワーを使う様である。施設内には治療設備、歯科治療室

やリハビリテーションの部屋もあり理学療法士などもある。もちろん医療費は、保険者から支払われ本人負担はないようである。また、全員に300スイスフラン(約3万円)のおこづかいが毎月支払われる。この中から施設内の理髪店(日曜のみ男性の日)やペディキュア(足の手入れ)の費用を払っている。

気になる費用だが、月々8,490スイスフラン(約85万円)である。資産状況に応じて社会福祉機関より援助を受けられる。現に95%の人が援助を受けて費用を支払っている。現在平均年齢85.6歳(67歳から10歳まで)。施設により異なるが、ここは65歳から入所可能。外国籍の人は、7年間在住で利用可能。援助なしで費用を支払うことができれば、即利用出来ることである。

#### 《雑感等》

欧州では、老後の面倒は社会でみるべきである」と基本合意があるようである。したがって、ホームなどの施設が終の住処の人が多いようであ



間嶋久美子

### 西蒲三村視察旅行に参加して

味方村・中之口村そして月瀧村三村合同欧州視察を終えてから早や一週間が過ぎ去ろうとしている。有意義だった視察の記憶が薄れないうちに筆を取りました。

今回の公式視察は、ゴミのリサイクル(ドイツ、フランスフルトのゴミ処理場)、ドイツの教育制度(ミュンヘン市イットリンガー通小学校)、福祉国家のあり方(スイスの老人ホーム)の三ヶ所を視察しました。私は母親としての立場からドイツの教育制度に深い感銘を覚えた。視察した小学校はミュンヘン市(人口百三十五万人でドイツ三番目の都市)北部にあつた。校長先生が快く出迎えて下さった。通訳は、みち子・バーツェンさんで16歳でアメリカに留学し、ドイツ人の御主人と知り合い、ミュンヘンに住んでい

るという事である。校長室に案内され、世界地図の中の新潟県に丸をつけてくれと言うのである。見ると五、六ヶ所丸がついてあり視察に来られた方々から印をつけていただいているのである。ミュンヘンは札幌と姉妹都市で北海道からの視察が多いようである。

校長先生の案内で二年生の体育の様子や授業を見せていただいた。日本とドイツの一番の違いは、授業が午前中だけということだ。遅くとも午後一時までは学校から帰らなければならぬ。だから給食がないという訳である。スイスも同じだった。クラブ活動は地域でやっているし、スイスも同じだった。クラブ活動は地域でやっているし、学校では校庭で野菜などを作程度の事しかやらないそうだ。ドイツの先生は非常に楽な職業だと思った。そのかわり宿題は二、三時間分位出るようだ。それから五年生になる時試験があり、多国籍のためもあるかもしれないが、国語、数学が悪いと進級できない人もいます。何回も何回も挑戦するそうです。五年生十三年生まであるそうで、六、七年生で高校生で終わるか、大学まで進学す

るか選択させられ、日本では小学校か中学校の時期にもう将来を決める訳である。大学はすべて国立で授業料は無料であるが、入学は簡単であるが、卒業する人はまれで百人に三人程度しか卒業できないのである。日本の大学とは全く逆で、勉強する為に大学へ入るのだからドイツの考え方が正しいと思った。小学校二年生だから授業といっても遊びながらやっており、小さい時いっぱい遊ばせているから、日本のように大きくなつてから遊ばない……と言われた。

校長先生は、十一時半過ぎから授業があるからおっしゃっていただくが、皆さんの熱心な質問で十二時半過ぎまで対応して下さった。私は初めはどういう団体か聞かれ、「単なる各種種が集まった村民」という事で軽くあしらわれたような気がしたが、メンバーの熱心な質問に校長先生も驚いたようである。そして今度は十月のビールフェアの時来て下さい。と言われ小学校を後にした。ゴミ工場、老人ホームの視察もそうだったけれど熱心な質疑応答で、どこへ行く時間もオーバーで、有意義な視察であった。以上は小学校

視察のあらましであるが、全体を通して感じた事は、ハイデルベルクにしろ、ローテンブルクの建物にしろ、ドイツの国民性がさせた産物ではないかと思つた。ハイデルベルク城からの眺めは世界一と言われている。それはドイツは古い物を大切に、外観を統一し、建物の高さを規制し、統一制をもたせたからだと思つた。ローテンブルクの町は中世の宝石といわれているが、古い建物を現在に残すには並たいていの苦勞ではないと思つた。全部壊して新しい建物を建てた方が簡単だろう……。古い歴史ある建物を現代で住みながら保存しているのに頭が下がる思いである。